HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シュニッツラーの『夢小説』
Author(s)	西村, 龍一
Relation	ウィーン世紀末 : 言語文化部共同研究報告書 1　第7章
Issue Date	1994-03-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57593
Type	journal article
File Information	nishimura.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第7章　シュニッツラーの『夢小説』

西　村　龍　一

I　シュニッツラー評価の可能性

今世紀前半のドイツ文学を理解する上で，ある作家の生誕年が1880年以前か以後かということは大ざっぱな境界線となりうるだろう。具体的な人名を挙げればこの境界線は，トーマス・マン，ヘルマン・ヘッセ，あるいはライナー・マリア・リルケといった人々と，フランツ・カフカ，ベルトルト・ブレヒトといった人々との間に引かれることになる。この境界線以前の作家たちは，なるほど市民的教養に裏づけられた19世紀的文化が崩壊しつつあるという鋭い危機意識を抱いていたかもしれないが，にもかかわらず彼らが作家として出発した最初のスタイルはこの市民的教養に根ざすものであった。一方これ以降の作家たちは，こうした市民文化とは断絶した，まったく新しいスタイルを携えてでなければ，そもそも作家として出発することができなかった。

ローベルト・ムージルを例外とすれば，ウィーン世紀末を代表する作家たちの多くはこの境界線以前に位置している。このような文学史の大きな流れを念頭において見れば，現代におけるシュニッツラー評価の試みはひとつの逆説をはらんでいることになるだろう。たとえば一時は同じ文学サークル「若いウィーン」に属していたこともあるホーフマンスタールとの対照。天才の誉れの高かったホーフマンスタールをさしおいて，当時オーストリアの代表詩人といえばまずシュニッツラーのことが念頭にのぼったというが，それは確かに理由のないことではない。おそらくホーフマンスタールはシュニッツラーよりもはるかに，自分が時代の境界線上に位置していることに自覚的だった，あるいはこの時代認識に，その作家活動において繰り返し形を与えようとした。この自覚が彼に，詩人であることを越えて思想家，文化史家としての役割を果たすことを要求したのである。彼はオーストリア・ドイツ語圏文化というよりは，西欧文化全体の歴史や未来の展望に考えを巡らし，その結果をいくつもの形で(『チャンドス卿の手紙』(1902)『詩についての対話』(1904)) 発表しアピールしていくこととなった。簡単に言えばホーフマンスタールはオーストリアの詩人，ウィーン世紀末の詩人というにはあまりにも国際人であり，ヨーロッパの詩人ないしは思想家でありすぎたのだ。

時代の境界に立つ思想家ホーフマンスタールの視野の広さや扱う問題の多様さに対して，

シュニッツラーの著作活動を特徴づけるのは一言でいえばある職人性，つまり信頼のおける一様さ，次第に焦点が絞られ深まっていく技術の巧みさといったものであり，裏返していえばそこにはまた頑固とか偏屈といったイメージがつきまとう。おそらくこうした特徴の総体が，ホーフマンスタールの開かれた国際性に対して，シュニッツラーをオーストリアの代表詩人，と呼びたくさせるものなのだろう。だが以下の考察は，シュニッツラーの職人性のオーストリア的，ウィーン世紀末的な特色は何か，といった問いからは直接には出発しない。問題はむしろ逆にたどられる。境界の意識を直接的に表明しなかった作家，境界の向う側でひたすら自分の技術に職人的に閉じこもっていったように見える作家が，なぜそのことによって逆にわれわれにとって訴えかけるものを持つのだろうか。境界を越えるこの普遍的な通路のひとつは，夢を描くためにシュニッツラーが追求した精密な技術に求められるだろう。

II　内的モノローグの解体

シュニッツラーの小説技法についてよく語られる特徴のひとつに，内的モノローグの徹底ということが挙げられる。内的モノローグにおいて小説家は現実の出来事それ自身の描写に重きをおかず，あるおおむね些細な出来事が登場人物の心の中にどんな想念を引き起こしたか，その心の波紋を詳細に描写していく。そして内的モノローグの技法の過激なもの，いわゆる〈意識の流れ〉と呼ばれる小説技法においては，この心理描写の過剰な詳細さは，現実における心理の複雑さの限界，つまり現実には人間はそんなこまかな心中の波紋までいちいち意識してはいないという限界を平然と無視してしまう。この場合わたしたちは絵画における印象派にその対応物を求めることができるだろう。印象派は確かに風景における光の詳細な観察と分析から出発して，その結果を克明にキャンバスに再現する。そしてその際，人は風景に目をやりその色や形を意識するときにそれをこのような細かい色彩の集合体として意識しているのではない，という異議申し立ては無視されてしまう。文学史が内的モノローグの手法やこれを駆使したシュニッツラーの作品を文学上の印象派という概念に分類するのはしごく当然と言えよう。

だとすればシュニッツラーの内的モノローグの技法が夢の技法に転換するとき生じるのは，これとはまったく対照的な事態である。登場人物の心理は，現実に彼が意識しえたであろう限界を越えて克明に描写されるのではない。登場人物と彼のまわりで起こることがらが現実のものであるとするなら，彼が意識したであろうはずのこと，意識しなければおかしいはずのことが一見不可解にも記述されないのである。この転換点はシュニッツラー後期の意欲的な作品『夢小説』（1925）の中に極めて明瞭に現れている。

『夢小説』のあらすじは結婚生活の倦怠期にさしかかった主人公フリドリンが，ある夕べ次々と起こる偶然から様々な恋のアバンチュールに巻き込まれかけるが，どれもなぜか実りのないまま途絶えてしまい，翌日の探索もむなしくすっかり幻滅して妻アルベルティーネのもとに戻り，すべてを告白して和解するといういたって単純なものである。フリドリンのアバンチュー

ルの夕べは，浮気心に関する妻との告白の交換，とりわけアルベルティーネの次の告白をその前奏曲としている。

我慢しきれなかったのか，それとも率直さと良心の点でまさっていたのか，アルベルティーネがさきに口をきった。夫に向かってためらいがちに，あの若い男を覚えているかとたずねた。去年の夏，デンマークの海岸で出会ったあの若い男。ある日の夕方，2人の将校といっしょに隣のテーブルについていた。食事の途中で電報を受け取ると，あわてて友人たちに別れを告げて立ち去った。（P37～P38）

アルベルティーネはことばをつづけた。

「黄色っぽい鞄をもって，急ぎ足でホテルの階段を上がってくるところだったの。ちらっとわたしを見てから階段を，2，3段のぼって，それからあらためてこちらを振り返ったわ。立ち止まって，ぱったり視線が合ってしまった。あの人はニコリともしなかった。そうね，むしろ顔を曇らせたふうだった。わたしもたぶん，そんな顔をしたのだと思うわ。ひどくうろたえてしまったものね。それからあの日1日，夢見ごこちで海岸にいましたわ。もしあの人がわたしを呼んだら，きっとその声に従った。そんな気がしてならなかった。……」（P38）

この告白がフリドリンにいかにショックを与え，それへのこだわりがいかに彼の意に反して噴き出してくるか，それを克明に描写するのに内的モノローグの技法はとりあえず極めて適している。たとえば第1のアバンチュールでフリドリンが死んだばかりの自分の患者の娘マリアンネを抱擁する次の箇所。

「マリアンネさん，お立ちなさい」

小声で言って，娘の上に身をかがめた。やさしく抱き起こしながら，ヒステリーの気があるかもしれないと考えた。横目で死んだ父親を見た。いまの言葉を聞いていたのではなかろうか。まだ仮死状態なのかもしれない。人間は臨終のあとも何時間かは仮死状態にあるのではないだろうか？娘を腕に抱きながら，少しからだから遠ざけるようにした。思わず知らず娘の額にキスをしたとたん，何やら自分が滑稽な気がしてきた。むかし読んだ小説をふと思い出した。まだ少年と言ってもよい齢ごろの青年が，母親の死の床で女友達に誘惑される。むしろ力ずくで凌辱される。――なぜかアルベルティーネのことが頭をかすめた。苦々しい思いがわいてくる。黄色い旅行鞄をもってホテルの階段を上がっていったデンマークの男。暗い，恨みがましい気持ちがこみあげてきた。彼はマリアンネをなおも強く抱きしめた。しかし，さっぱり興奮を覚え

ない。艶のない髪や，しめっぽい衣服のなまあたたかい匂いに，軽い嫌悪を覚えさえすらした。

（P53～P54）

もちろん抱擁の短い間に脳裏をかすめていったこれほど様々な思いを，現実の人間はこのように整然と細部に渡るまで記憶してはいないだろう。それは小説だからこそ可能な虚構なのだが，けれどもそれはもし心理という太陽光線を分析するプリズムといったものが存在するとしたら，さぞかしこのようなスペクトルが得られるだろうといった意味での，あるリアリティーを持っている。

この場面のあとフリドリンは娼婦ミッツイに出会ったりして夜はますますふけていく。だが彼はアルベルティーネの待つ自宅にはなかなか帰る気がしない。真夜中を回って彼はいきつけのカフェーに入り，そこでおもいがけずこちらをじっと見つめている旧友ナハティガルに気付く。この辺りから話しは次第に夢の雰囲気を濃くしてくるのだが，ナハティガルはフリドリンに，彼がこれからピアノを弾きにいくことになっている秘密の仮装舞踏会とそこで見た裸体の女性達の話しをし，フリドリンはぜがひでも行きたくなる。だがそれには仮装と御者が教えてくれるはずの合い言葉が必要だ。フリドリンはナハティガルに馬車が来たら時間稼ぎを頼み（こんなことを言っている間に馬車は来てしまう）その間に散歩の時に何度か見かけた貸し衣装屋に駆け込む。夜中の１時にもかかわらずなぜか店は開いている。さらにいくつか奇妙なことが起こる。まずフリドリンは仮装に何となく黒い僧侶のマントを選ぶのだが，舞踏会に行くとなぜか人々は同じ僧服姿をしている（フリドリンは不思議に思わない）。次に時間が切迫しているのに，貸し衣装屋で突然変な小娘が出てきて彼に甘えかかると，主人相手にこの娘のことであれこれ交渉しようとする。最後にようやく貸し衣装屋を出てくると馬車はまだちゃんと待っていてナハティガルとの次の会話となる。

「ほんとに衣装を用意したんだね？」
「こらんのとおりだ。で，合い言葉は？」
「どうしても行くというの？」
「ああ」
「合い言葉は〈デンマーク〉」
「そんなバカな」
「どうして？」
「いや，何でもない。―この夏，偶然，デンマークの海岸へ行ったもんでね。―じゃあ、乗れよ。でも、すぐには出ないでさ。ぼくが向こうで馬車をつかまえるのを見とどけてから走り出す。いいね」（P87～P88）

ここでは2つの奇妙な出来事が起こっている。ひとつは秘密舞踏会の合い言葉が〈デンマーク〉であったというありそうもない偶然であり，もうひとつはマリアンネを抱擁する先の場面の内的モノローグから予想するなら，フリドリンの心中に激しい波風を立てるにちがいないこの「合い言葉はデンマーク」に対して，まさに心理を克明に記述すべきあの内的モノローグが完全に欠落してしまうことである。この欠落は完全に作者の意図的なものだ。この後フリドリンが何度となくこの舞踏会の謎を解こうとするさいにも，その内的モノローグにおいてこの「合い言葉はデンマーク」という偶然だけは決して思い出されないのだから。簡単に説明すればここでのメカニズムは以下のようなものである。マリアンネの場面では克明な内的モノローグによって心理として掬い取られていた「デンマーク（の若い男）」は，上の場面では小説の中のひとつの出来事として展開されてしまう。そして小説の主人公は，自分の心理がモノローグとしてではなく外の出来事として展開されるのに比例して，この出来事に対する心理や意識を表明する理由をなくしていく。つまり驚いてしかるべきことにもなぜか驚かなくなっていく。この相関的なメカニズムをくぐることによって初めて，小説全体の記述は読者に夢の中をさまようような感覚をあたえるのだといえよう。このメカニズムはさらに検討するに値する。

III　偽装としての夢

ウィーン世紀末におけるシュニッツラーの偉大な同伴者ジークムント・フロイトはその『夢判断』(1900) の中で「夢は，ある（抑圧され・排斥された）願望の，（偽装した）充足である。」というふうに定義している。人間の超自我（＝理想的な自我）によって抑圧された好ましからざる願望は，無意識の中で常に充足される機会をうかがっている。だがそのためには自分を偽装して超自我の目をごまかし，その検閲を通過しなければならない。夢の中で生じる出来事の奇妙さはしたがってこの偽装の持つ奇妙さであることになる。もうひとつ夢の中に登場する〈私〉，あるいは（夢の小説の）主人公とは，そのつど自己のほんの一部分，超自我の支配下にある自我にすぎず，またこの自我が直面している出来事（たとえば奇妙な偶然）も，もともと自己の無意識が産み出したものに他ならない。したがって夢の中〈私〉は夢の中での出来事に決して現実世界でのように驚くことはないし，また驚いたとしてもそれはすぐに忘れられるかまた妙な具合に納得されてしまうのが常なのである。

フロイトはその精神分析理論において，夢以外にも様々な心理現象を抑圧された願望の偽装した充足として分析している。そのひとつに言い間違えがある。たとえばフロイトは『精神分析入門』(1917) の中で，見知らぬ婦人に「あなたを begleiten＝エスコートしてよろしいでしょうか」ときくつもりで「begleitdigen してよろしいでしょうか」と言い間違ってしまった男の例に言及している。この場合フロイトに従えば男が無意識の内に抑圧していたものは beleidigen＝侮辱（強姦）するという願望であり，begleitdigen という言い間違えはこの無意識

の願望の側から見るならばその偽装された充足，あるいは偽装された表現ということになる。フロイトはまたbegleitenとbeleidigenという言葉の形の上での類似という，普段は注目されることのない関係が保持されている心の領域を特に重視して，これを前意識と名付けている。

さて上のような精神分析理論を『夢小説』に，とりわけあの「合い言葉はデンマーク」という奇妙な偶然に適用するとどのような解釈が可能だろうか。アルベルティーネの意外な告白の後，フリドリンが心の底で望んでいるのは，彼女の不意に見失われ秘密になってしまった心を再び理解し取り戻すことにちがいない。しかしこの願望をフリドリンは，とりわけそれがあの見知らぬ「デンマークの若い男」への彼女の不意な恋慕という形でやってきたためもあって，プライドゆえに抑圧してしまう。その夜のアバンチュールへの没頭や帰宅を嫌がる気分はすべてこの抑圧から生じたものだ。だが抑圧されたbeleidigen(侮辱する)が正にその反対の概念を持つbegleiten(エスコートする)にもぐりこんでbegleitdigenという偽装された奇妙な表現を生むように，アルベルティーネの見失われた心を再び理解するのに避けて通れない「デンマークの若い男」も，依然として抑圧されながらしかし，アルベルティーネのもとに戻るのとは一見正反対の秘密舞踏会に通じる合い言葉として，その奇妙な表現を見いだすのだ。願望のこのように偽装された表現とはまた，この願望と超自我が取り結ぶひとつの妥協なのであり，後者の検閲は「デンマークの若い男」をそのまま通すわけにはいかず，「合い言葉はデンマーク」として〈若い男〉という決定的な部分を削除してしまうのである。

begleiten—beleidigenの関係と〈合い言葉X〉—〈デンマークの若い男〉の関係の平行性は別の側面からも指摘できるだろう。begleitenもbeleidigenも内容的にはたしかに対極的だが，し

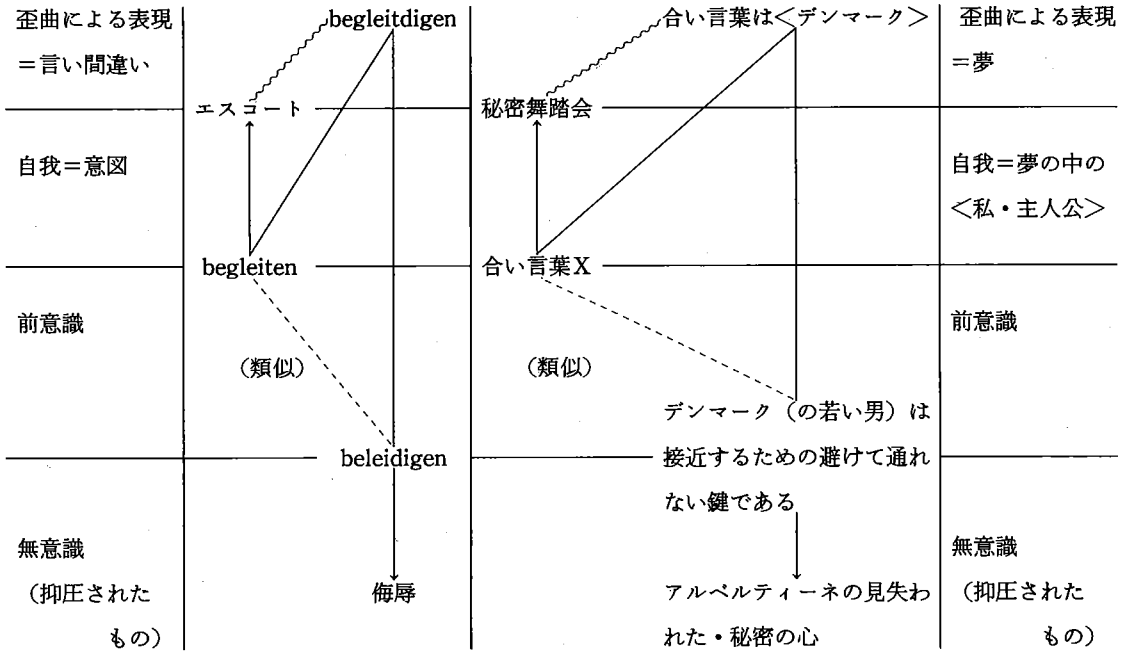

図1

かしともに女性に関して用いられるならば特別なニュアンスをもつ（begleiten：お供する→エスコートする／beleidigen：侮辱する→強姦する）という共通点がある。同じように〈合い言葉X〉においては大勢の女が登場する秘密舞踏会が，〈デンマークの若い男〉においてはアルベルティーネというただひとりの女が問題なのではあるが，共に〈ある秘密のものにいたる不可欠の鍵〉という１点では共通しているのである。

（以上図１参照）

IV　アルベルティーネの夢

さてフリドリンが秘密舞踏会から叩き出され明け方に帰宅した後，目覚めたアルベルティーネが彼に物語る長い夢はこの小説のひとつのクライマックスを形成している。興味深いことに彼女の夢は夢であると同時に，まるで鏡のようにその夜のフリドリンの夢のような冒険を映し出し，そこに隠されていたものを明るみにしていくのである。たとえばある目立たない箇所で，あの〈デンマークの若い男〉が「合い言葉はデンマーク」と同様にやはり検閲された形で，つまり彼が階段ですれ違ったときにもっていた「黄色っぽい鞄」によって代理されて登場する（フロイトならより重要なものに置き換わる「新鮮な些細な印象」と呼ぶだろうものだ）。だがアルベルティーネの夢の中では，この黄色い鞄にせっせと彼女のために買い求めた装身具を詰め込むのは他ならないフリドリンであって，夢のこの細部はフリドリンの無意識において〈デンマークの若い男〉が何を意味していたのかを暗示している。

やがてアルベルティーネの夢はまるでフリドリンのあの秘密舞踏会での体験を裏側から見ているかのような様相を呈してくる。いずれの場合もフリドリンは黒い僧衣ないし黒いマントを身にまとっている。裸体夢のモチーフがどちらにも顕著に認められる。秘密舞踏会のフリドリンは仮面をとれと迫られ「仮面の者たちの面前でひとり素顔をさらすのは，着衣の人々の前でいきなり裸になるよりも何倍か耐えがたいことだ」と思うのに対し，アルベルティーネの夢の中のフリドリンは，後ろ手に縛られひとり群集の前に真っ裸で立っている。そしていずれの場合も，ひとりの女性がフリドリンに救済のチャンスを提供するのに彼はそれを頑なに拒んでしまう。つまり舞踏会では「謎の女性」がいますぐ逃げ出せば助かると囁きかけてくるのに「いま大切なのは，君だ」とぐずぐずすることで遂にはこの女性を犠牲にしてしまう。一方アルベルティーネの夢の中では「女王」がわたしの恋人になるなら死刑をめんじようと言うのに対し，アルベルティーネへの貞節を頑固に守り通して処刑されてしまう。

夢の中でのフリドリンの，どんな悲惨な目にあっても守り通そうとするアルベルティーネへの貞節に匹敵する強い感情は，秘密舞踏会においては「謎の女」に対する強い関心以外に見当らない。つまりアルベルティーネの夢は〈合い言葉はデンマーク〉と同様，秘密舞踏会へのフリドリンの唐突な好奇心が実は，アルベルティーネへの関心の偽装された表現にすぎないことを暴露しているのである。同じような偽装は「いま大切なのは，君だ」というフリドリンのセ

リフにも読み込むことができるだろう。このセリフの〈君〉によってフリドリンの自我はむろん目の前の謎の女を指しているつもりなのだが，彼の強い無意識の関心に照らして言えばこれはアルベルティーネを意味するのでなければならない。そして逃げ出しなさい，と勧めているときに今度は謎の女は，アルベルティーネの夢の中の女王に対応していることになる。さらにアルベルティーネの夢の中ではこの女王はまた，フリドリンが避暑地で駆け落ちをちらりと考えたと告白する海辺の娘でもある。つまり秘密舞踏会に出かけていくフリドリンはまったく奇妙なアバンチュールに胸を躍らしているのだが，これをアルベルティーネの夢という鏡に映してみると，すべて彼が前日に受けたりおもいだしたりした印象が変形して登場してくるひとつの夢でしかない。フリドリンはアルベルティーネの手のひらの上で，あたかも釈迦の手のひらの上の孫悟空のように踊っていただけのように見える。たぶん彼のチャンスは謎の女＝女王＝海辺の少女の勧めに従って舞踏会なり処刑なりから逃れることだったのだ，そう考えてみることもできるだろう。それがもしかしたら現実では海辺の少女と駆け落ちしてアルベルティーネを捨てることに対応していたのかもしれない。ところがフリドリンは「いま大切なのは，君だ」といつまでもぐずぐずし，それが実は自分のアルベルティーネに対する執着の歪められた表現だと気がつかないのである。

V　シュニッツラー文学の志向性

『夢小説』として描かれた主人公フリドリンのこのような彷徨は結局のところ何を意味しているのだろうか。なるほど彼にとって真の執着の対象だったのは実はアルベルティーネだった，その欲求が無意識のうちに抑圧されてただ夢のような冒険の中にその偽装された表現を見いだしていた，このことはかなりの程度たしかなことのように思われる。2人の和解をもってこの小説は結末を迎える。けれどもこの和解で何が達成されたというのだろうか。たとえばフリドリンは様々な女性とのアバンチュールを経た後で今や前よりも遥かにアルベルティーネを理解するようになったのだ，そのように言うことは到底できないだろう。この小説に登場する女性たちは—アルベルティーネをも含めて—その客観的な性格という観点からはほとんど描かれていない。あるいはまた主人公を中心にして言えば，この女性とならやっていけそうだとか心がなぐさむだとかあるいは一緒にいると耐え難いとかいった，関係の中で次第に他者が深く見えてくる，そうした経験が描かれていない。なるほどフリドリンの心の抑圧，それが生み出す夢という表現のメカニズムは極めて精密にとらえられている。しかしそれはあくまでも主人公の心のシステムの複雑さなのであって，人間が他者との関係の中で生きる経験の複雑さや深みを必ずしも意味しないのである。そこにはある独特な—そしてこれは〈夢小説〉一般が抱え込んでいる問題性かもしれないのだが—複雑さと奥行きの欠如との共存がある。

「わたしは人間には関心がない。関心があるのはそのケース(事件，症例)だけだ」というシュニッツラーの日記の言葉がある。あるいはごく若い頃の日記で「かわいい女の子（das süße

Mädel)」というものを，こう痩せてスタイルがよくてブロンドの髪がこうカールしてと詳しく定義した後で「で知性は？もちろん全然。でもぼくは彼女の知性にキスするわけじゃない」とも書きつけている。シュニッツラーの文学や思想全体において，その『夢小説』にも通底する，ある過激な表面性ともいうべきものが支配しているように思える。それは偽りの見せかけだけの，たとえばウィーン世紀末の市民社会で流通していたであろうような深さ，たとえば「知性」を拒絶する，その意味ではたしかに—フロイトもまたそういう一面を持っていたように—暴露的でスキャンダラスでさえあったかもしれない。けれどもシュニッツラーはさらに進んで偽りではない真の人間の経験の深みとか，人間の真の関係とか性格とかを提出しようとしているわけではない。先に進んで新たな世界を構築するのではなく，あくまでケース，症例，夢というスクリーンの上に，これまで深みと信じられてきたものを唐草模様のように写し出してしまおうとする。この態度がシュニッツラーに言わせれば「個人主義」なのであり，またその読者にしてみれば初めに触れたような職人的な頑固さといった印象が生じるゆえんなのだろう。

ところでこの人間ではなくケースだ，という考え方は，むろん徹底的につきつめていけばこの後に登場するローベルト・ムージルの文学観にきわめて近いものをもっている。おそらくそれは両者が影響を受けたという，やはりウィーンで活躍した19世紀後半の哲学者エルンスト・マッハの思想にもよるのかもしれない。だがシュニッツラーはこの哲学を「個人主義者」としてスクリーン化することに満足し，ムージルのように世界をすべてこのスクリーンへと抽象化する，法外な野望には取りつかれていなかったように思われる。それがシュニッツラーの文学が，現在にも通用するその〈ケース〉描写の精密さにもかかわらず，あたかもウィーン分離派の美術がどんなに抽象化しても決して抽象美術とはならなかったように，われわれにとって境界の向う側の空気を呼吸しつづけている理由なのかもしれない。

注

『夢小説』からの引用はシュニッツラー『夢小説・闇への逃走　他一編』池内・武村訳　岩波文庫　1990年による。また次の文献を参考にした。

Arthur Schnitzler: Traumnovelle und andere Erzählungen. Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt am Main 1979

Hermut Scheible: Schnitzler. Rowohlt Taschenbuch Verlag, Reinbek bei Hamburg 1976

フロイト『精神分析入門』高橋・下坂訳　新潮文庫　1977年

フロイト『夢判断』高橋義孝訳　新潮文庫　1969年